景況レポート

（10月分・情報連絡員80名）

原油・原材料価格が高騰するも景況感は回復傾向

【概況（全体）】

10月分の県内景況は、前年同月と比較して景況が「好転」したとする向き16.3%（前回調査13.8%）、「悪化」が30.0%（同33.8%）で、業界全体のDI値は－13.7となり、前月調査と比較し6.3ポイント上回った。

全国及び東北・北海道ブロックとの比較では、非製造業において全国及び東北・北海道ブロックを大きく上回るなど、県内景況感に回復の兆しが見られる結果となった。

【業界別の状況】

鉄鋼・金属や鉱業が好転割合を維持し、サービス業で悪化割合が減少した。一方、食料品製造業、繊維工業及び商店街で悪化割合が増加した。

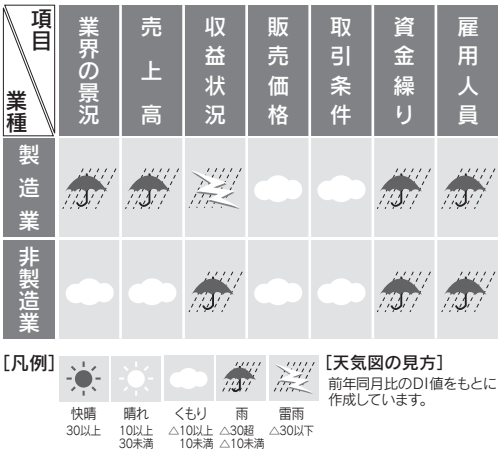
全国的に見ると、自然災害や猛暑の影響が一段落したことから、売上高をはじめとした各種指標が上昇するなど、景況感は改善傾向にある。

その一方で、原材料費・人件費・燃料費等の経営コスト上昇圧力は引き続き強く、人手不足の慢性化も深刻な状況であることから、中小企業の先行きは引き続き注視していく必要がある。

＜全国及び東北・北海道ブロックとの景況DI値の比較＞

	秋田県	全　国	東北・北海道
全　体	－13.7	－17.9	－23.9
製造業	－25.0	－16.1	－28.7
非製造業	－6.2	－19.3	－21.2

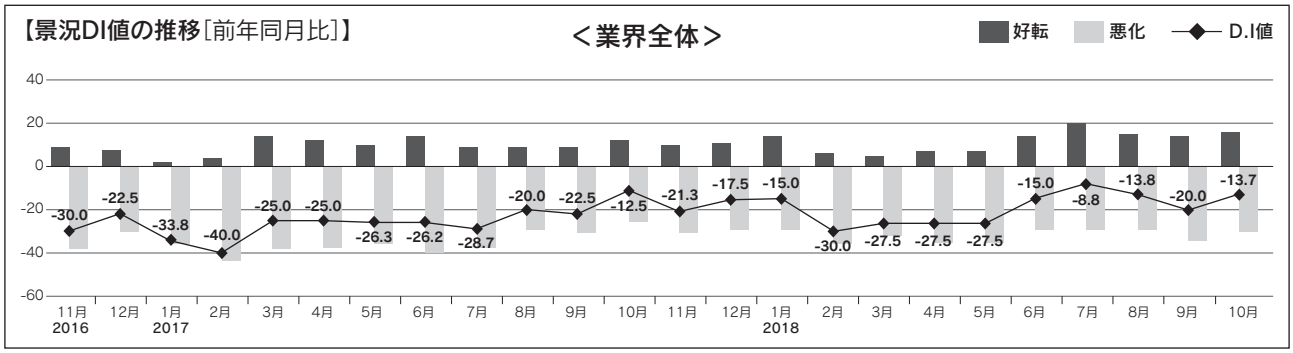
＜景況天気図＞

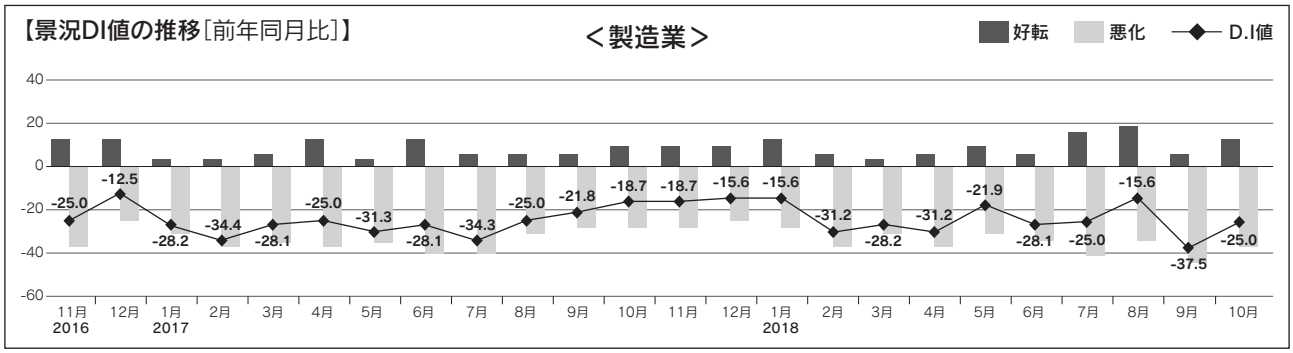


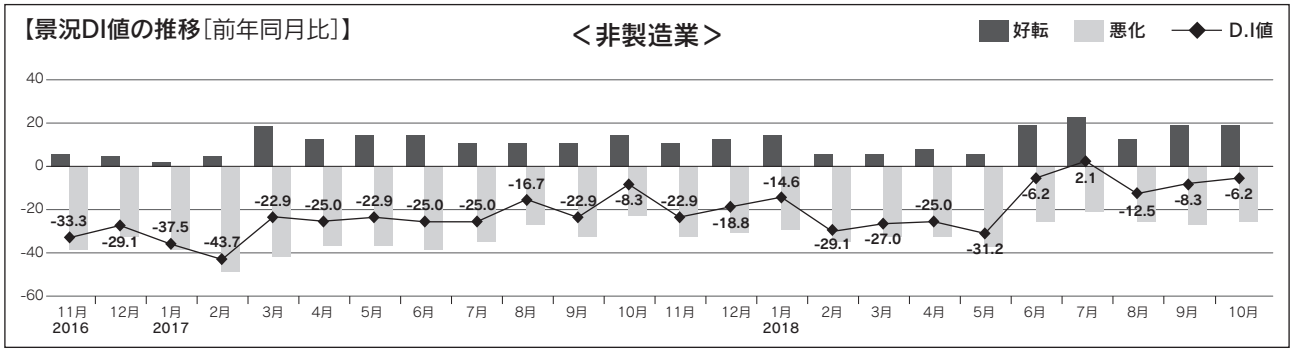
※DI値とは、Diffusion Index（ディフュージョン・インデックス）の略で、増加（好転）したとする企業割合から、減少（悪化）したとする企業割合を差し引いた値です。

【業界の声】　～製造業～　（回答数：32名　回答率：100%）

食料品（パン）	10月は天気も安定していたため、売上は前年と同様の状況だった。ただし、ガソリン等の値上げによってコストが高止まりしている。
食料品（精穀・製粉）	原料である米・小麦等が収穫期に入ったが、米は作況不良、小麦は北海道の大幅減収に伴い、原材料価格が高騰している。
繊維工業（繊維）	定番数量の増加により生産数は若干向上しているが、今後、新商品の生産に入るため、ダウンすることが予想される。
木材・木製品（一般製材）	原木の入荷量は7月以降減少傾向にあり、原木の供給不足から仕入価格は高騰し、収益を悪化させている。原木不足により生産拡大も困難な状況にある。
木材・木製品（素材生産）	一般製材用原木の生産量は安定して推移しているが、県外への原木移出の増加により一般製材用原木が不足し、価格は強含みで推移した。合板用原木は、先月同様、安定した供給となっているが、国産針葉樹合板の引き合いが好調で各合板工場はフル稼働となり、合板用原木の在庫が減少している。
木材・木製品（外材）	10月は3ヶ月連続で、秋田港にロシア材（カラマツ）1船5,950㎥の入港があった。秋需要は盛り上がりを欠いており、合板メーカーの強気一辺倒にも陰りが見えてきている。また、メーカーでは建値を堅持しているものの、構造用合板及びフロア合板等の非構造用合板ともに相場は弱含みで推移している。猛暑や大雨の影響などから、例年以上に国産材の丸太不足が浸透してきており、価格も強含みになっている。
窯業・土石製品（生コンクリート）	10月の出荷数量は前年比111.2%であり、4月～10月累計で前年比120.1%となった。昨年度に過去最低の出荷数量となったことから、今年度当初は年間出荷数量を548,000㎥と低めの数字を想定していたが、再想定の結果、617,000㎥（当初想定比112.6%）となり、大幅な出荷増となりそうである。
鉄鋼・金属（鉄鋼）	先月に引き続き、受注面、収益面ともに好調のようだ。これからの冬場に向けて、燃料費等コスト面での負担、一部材料価格の上昇など不安要素はあるものの、当面は安定が見込まれる。
その他（漆器）	10月は組合事業の最大のイベントである「川連塗りフェア」を開催した。来客数は昨年度より減少したものの、売上額は僅かながら伸びてきた。11月はフランスの展示会に出品する事業もあり、漆器業界全体への波及効果を期待している。







【業 界 の 声】 ～非 製 造 業～

（回答数：48名　回答率：100%）

卸売業（青果）	前年同月比111.9%で推移した。本年夏期の異常気象の影響で中旬までは生産量や価格が不安定な状況が続いたが、下旬にかけては関東地域の生産が多少上向き、高値傾向は改善に向かった。ただし、果菜類（トマト、胡瓜等）は回復が遅れており、入荷量は不安定である。また、消費動向は鈍化傾向が続いており、本組合としては景況が芳しいとは言えない状況である。
卸売業（米麦卸）	平成30年産米の最終的な作況指数は、全国99・秋田県96（10/15現在）となり、9/15公表の作況より2ポイント下がった。収穫量が少なければ、米の販売価格が上がるのが常識的だが、本年産米の場合は少し事情が違い、販売価格はすぐには上昇しない傾向と分析している。理由として、29年産米の繰越米があること、昨年の価格高騰で消費減退を招いていること、業務用業界は外米使用に方向転換する準備があること等、価格上昇に歯止めを掛ける条件が揃っていることが挙げられる。年明けにかけて、価格の動向は注視していかなければならない。
小売業（石油）	ガソリンの小売価格は1ℓあたり157円90銭で前月比3円90銭、軽油は137円60銭で前月比4円90銭、配達灯油18ℓは1,840円で前月比88円とそれぞれ値を上げた。原油の高騰により末端価格が上昇に転じたことから、資金繰りは厳しい状況にある。
小売業（花卉）	10月は市場の売上額、仲卸・組合員・員外の買い上げ額が1割近く伸びたが、入荷量は落ちている。実態は、菊やバラなどを中心に高値が続いており、例年の約1.5倍の価格になっていることから、小売店では厳しい状況が続いている。
商店街	10月の家電・酒類の販売は前年並み、身の回り品や食料品の販売は前年比減で推移した。（秋田市）
サービス業（建築設計）	大型物件に加え、小型物件の数が増え各組合員とも多忙の状態が続いている。しばらくは好調が続くものと予想している。
建設業（建築リフォーム）	消費税増税前の受注と冬前施行が駆け込んでいる。一方で、仕事があっても職人や下請業者が間に合わず、着工遅れが出始めており、今後、受注を残して資金不足などに繋がる懸念がある。
運輸業（トラック）	10月は軽油価格が前月比で更に1ℓあたり4円上昇したこともあり、運賃交渉はしやすくなった。12月から運賃値上げに対応してもらえるケースも出てきている。米の出荷が最盛期を迎えており、各社とも忙しい状況にある。